

民の参加による維持管理活動が行われています。また、ため池の多目的活用と保全の方法について検討を行い、ため池の重要性の普及啓発や、活用の促進を図るほか、ため池景観を県のシンボルとして「まほろば眺望百選」「奈良県大規模自転車道」「歩く・なら」ウォークルートなどに関連させて紹介します。



深田池（檀原市）

『具体的な取組』

- 環境に配慮した川づくりを実施するとともに、「川に親しみ」「川に集い」「川に学ぶ」取組を進めます。
- ため池の多面的活用について、利水、治水機能のほか、生物多様性保全や親水利用など、自然環境面でのさらなる活用を図ります。
- ため池利用実態調査の結果をもとに、さまざまな生きものが生息・生育する「ため池活用モデル」の策定を検討します。

数値目標

- 多自然型護岸の整備延長の割合：35.6%（H20年度）→37.6%（H27年度）
- 大和川の水質改善 全国ワースト上位からの脱却
- および重点対策支川のBOD値5mg/Lの達成（H27年度）

④都市部

奈良県の都市部は、大和平野を囲む「青垣」の山々や緑豊かな丘陵地、古墳、社寺など、歴史的に形成、蓄積された原風景の中にあり歴史的な重層性を有した都市景観を持っています。また、近畿圏は、飛鳥京、藤原京、平城京、平安京など、日本の首都として機能してきた歴史を持ち、この歴史の中で人と自然の共生が図られ、多様な文化を生み出しながら大都市圏へと成長してきました。現在も都市を包み込む豊かな自然環境が残り、また、歴史・文化に培われた自然環境が見られるなど、自然の魅力が享受できる地域です。

都市部の生物多様性を保全していくためには、計画的に生きものの生息生育環境の創出、保全、再生およびネットワーク化を進めていくことが必要です。市街地、都市周辺、丘陵、

山地のそれぞれの場所で、河川、公園緑地、街路、学校、社寺、御陵などの緑資源を保全・活用し、緑地や水辺の再生創出などにより、市街地と市街地周辺の自然環境のネットワークを図ります。また、市町村が定める緑地の保全および緑化の推進に関する基本計画（緑の基本計画）に生物多様性の観点を加えるよう働きかけていきます。そのほか、地域における生物多様性を確保し「自然と共生する社会」の実現を目指し、身近な自然としての「ビオトープ（生物生息空間）」を確保した地域づくりを支援、促進します。（仮称）「生物多様性体験学習推進事業」として、学校、地域住民、NPO団体などが連携して行う「学校ビオトープ」の整備・改修およびその活用を検討します。

なお、奈良県では市町村が定める都市計画について、「奈良県環境基本条例」の配慮指針による「生物多様性の確保」が図られるよう求めています。

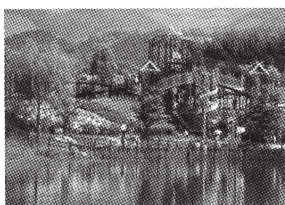
【公園・緑地の整備】

都市公園や緑地は、都市で生活する人々の憩いの場、レクリエーションの場であり、都市景観をうるおいのあるものにします。また、騒音などの公害緩和に役立ち、災害時の避難場所ともなるなど、都市の生活環境として欠かすことのできないものです。

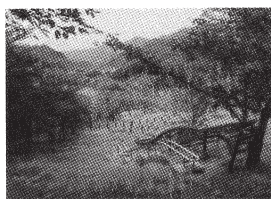
都市公園の面積（ha）

平成23年3月末現在

種別	住区基幹公園	都市基幹公園	大規模公園	特殊公園	国営公園	都市緑地	広場公園	緑道	都市公園合計
面積	490.79	248.03	554.98	42.22	46.10	269.19	0.39	3.93	1,655.63



こうずけ
上野公園（五條市ホームページより）



天理ダム風致公園
（天理市ホームページより）

【鎮守の森】

さかのぼれば、明治以前は集落ごとに大小さまざまな神社があり、それぞれに鎮守の森がありました。人々は山から里に降りてくる神様を迎えるために、集落の中の小高い場所に木を植え、森を育てました。これが「鎮守の森」です。この森が元気であれば神様が来て地域を守ってくれる。だから、みんなで協力して世話をし、大切に守り育てたのです。



往島大社（生駒市）

往馬大社は、神奈備《かんなび》（生駒山）を御神体として祀られた日本有数の古社です。生駒市街にあります。生駒市の境内を覆う鎮守の杜は奈良県の天然記念物に指定されており、太古から変わらぬ自然の森を今に伝えています。

『具体的な取組』

- 市街地の社寺境内は、自然性の高い植生が残っている場所であるため、鎮守の森や境内地の緑地の保全を推進します。
- 学校や病院などの公共施設では積極的に緑化を図り、商業地の緑化空間の創出などに努めます。
- 「生産緑地地区」は、市街化区域内にある農地などについて良好な都市環境の形成のために定められています。緑地機能の維持を図るため適正な保全を図ります。
- 都市公園において、生きものの生息・生育環境となる水辺の保全・活用を図ります。
- 近畿圏における水と緑のネットワークを形成し、大和川水系や金剛生駒山地など、近畿広域圏の自然環境の質の向上を図ります。

（４）水循環の再生

水は、生きものの生息・生育空間として重要なものです。生きものは壮大な水循環の過程の中でさまざまな恩恵を受けています。奈良盆地では昔、「水一升は米一升」といわれるほど、水は大切でした。そのため、水争いがたびたび起こりました。雨量が少ない奈良盆地では、人々は川に堰をつくって水をためたり、ため池をたくさんついたり、地下水を利用するために井戸を掘るなど、さまざまな工夫をして生活や農業に必要な水を生み出し大切に使ってきました。また、昔は川で遊んだり、泳いだり、水を飲んだりするなど、川は身近な存在でした。

しかし、現在ではくらしの中で水に対する愛着や関心が薄くなっているようです。そこで県では、水に愛着を持って守りながら使う「里川の再生」を図っています。「里川」とは人々のくらしに根づく身の回りの水辺で、川以外に農業用水路、ため池、水田、里山の湧き水なども含みます。水路・河川を活用したくらしに身近な「せせらぎ」など、憩いとやすらぎのある、親しめる水辺の創出を進めています。水源の確保にあたっては、湧水や下水処理の高度化による再生水などを有効に活用していきます。また、河川・水路沿いの緑化や歩行空間・サイクリングロードの整備など、魅力ある水辺のネットワークを創出するとともに、護岸緑化などによる自然景観の確保や、涼やかな景観を形成します。平成18年2月に、大和川での天然アユの遡上^{そじょう}が報道されました。大和川にアユが戻ってくるように下流の地域・機関と連携して水質改善にも取り組みます。

県では健全な水循環の構築を図るため「なら水循環ビジョン」を平成22年に策定しました。4つの基本目標として「保水力の向上」「水利用の適正化」「水質の保持と排水の浄化」そして、身近な里川を流域住民と協働して再生をする「地域力による水循環の再生」を掲げています。生活に密着して守り続けてきた身近な川を取り戻すために支川単位での流域ネットワーク設置の検討などを行っています。

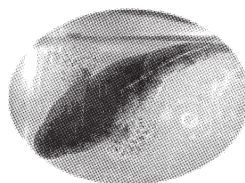
大和川清流復活ネットワークの設立（平成20年11月）

大和川の水質は、昭和47年以来近年まで全国1級河川中ワースト3位までにランクされ続け、H17～19までは連続ワースト1でした。ワースト上位を脱却し、国際文化観光都市にふさわしい清流の復活をめざすため、県・市町村・国・民間団体が構成されました。

①現状の徹底分析ときめ細かな分析と対策の実施 ②情報発信 ③民間団体等との協働の推進、以上の3つを基本方針とし、水質改善を推進しています。



大和川の支川・菰川一斉清掃（奈良市）

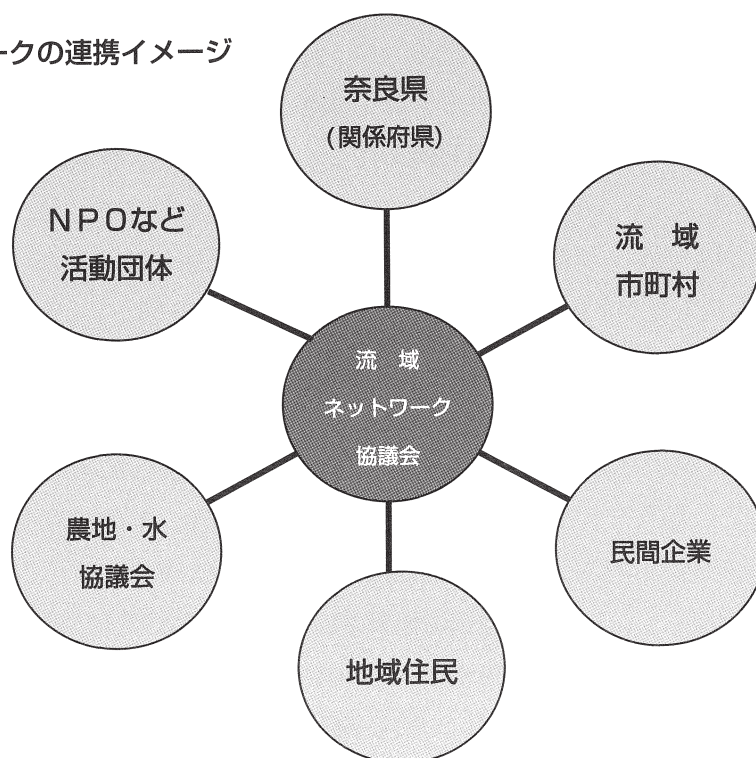


ドンコ



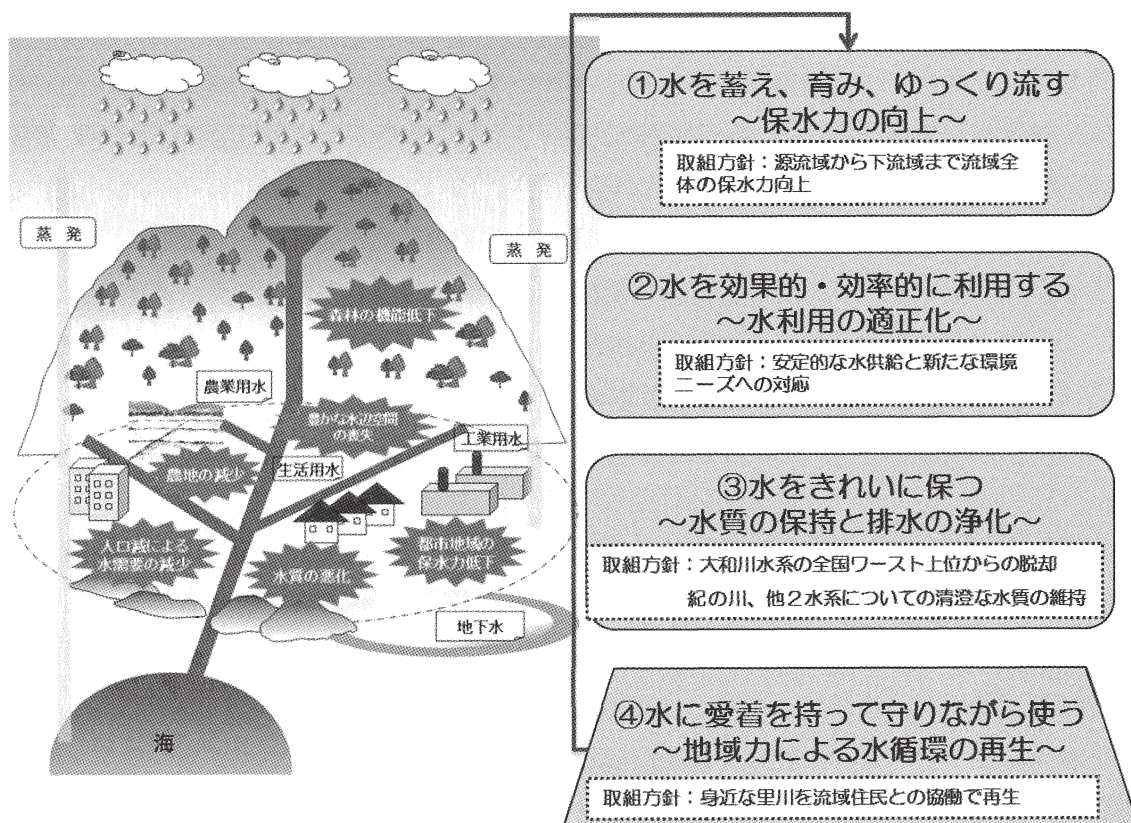
カワナ

流域ネットワークの連携イメージ



水循環ビジョンにおける4つの基本目標

水をとりにくく現状と課題に対し、水循環の視点で流域全体で取り組むべき対応策を検討したうえで、4つの基本目標を設定しました。



『具体的な取組』

- 合併浄化槽の設置促進や食用油の拭き取り・アクリルタワシの利用啓発、廃食油回収システムの構築などについて、「奈良県山の日・川の日」水質改善キャンペーンや住民向け出前講座の場で広報を行い生活排水対策を推進します。
- 大和川清流復活ネットワーク「よみがえれ！大和川清流復活大作戦」の取組により大和川の水質改善対策を推進します。
- 吉野川流域市町村と連携を強化するとともに、吉野山における事業系単独浄化槽を合併浄化槽へ転換を図り、清流吉野川の保全対策に努めます。
- 農地に起因する水質汚濁負荷の低減を図るため、農業や化学肥料の適正使用および使用量の削減を促進します。

数値目標

污水处理人口普及率：83%→87.6%（H27年度）

（５）生態系ネットワークの形成

野生動植物の生息・生育環境を保全し、生物多様性が確保される県土づくりを進めていくためには、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有している重要地域を核として、有機的に連携した生態系ネットワークを形成することが必要です。このことにより、野生動植物の生息・生育環境保全だけでなく、良好な景観や、人と自然のふれあいの場の提供、都市部の環境保全、水循環の再生など、多面的な機能が発揮されることが期待されます。生態系ネットワークとは生態系の拠点の適切な配置やつながりのことです。その形成にあたっては核となる地域（コアエリア）および、その地域の外部との相互影響を軽減するための緩衝地域（バッファゾーン）を適切に配置、保全します。そして生きものの分散・移動を可能とし、種や遺伝的な多様性を保全するため、これらの生きものの生息・生育地をつなげる回廊（コリドー）を確保することを基本とします。

生態系ネットワークの形成にあたっては奥山自然地域、里地里山・田園地域、都市地域などの生息・生育空間が河川、道路沿いの緑地などの水と緑によって有機的に連結された状態を確保していくことが大切です。そこで県では、生態系ネットワークの核となる優れた自然環境を有する地域を、奥山エリア・里山里地エリア・都市部ごとに抽出し、県土生態系ネットワーク計画のイメージ図を作成します。特に奈良盆地については、緑と水の回廊をつなぎ合わせ、生きものが移動できるような「生きものの通り道」を確保し、県民の身近な「自然散歩道」としての活用を図ります。

【歴史文化・生きものたちをはぐくんできた大和川】

大和川は、古くから川船を使って人や物資の輸送が行われていました。「日本書紀」の記述から、古くは中国・隋の使いが難波から大和川をさかのぼり、三輪付近の海石榴市（つばいち）まで運ばれたことが分かります。また、明治時代に鉄道ができるまで奈良県と大阪府を結ぶ重要な交通路でした。河合町にはかつて「川合浜」という船着き場があり、奈良からは米や綿が、大阪からは肥料などが運ばれました。大和川は歴史文化だけでなく、豊かな自然環境もはぐくんできました。大和川の源流には春日山原始林、与喜山暖帯林などがあり、これらの山地部はカワムツ、アカザ、ムギツク（魚類）やカジガガエル、カスミサンショウウオ（両生類）、ゲンジボタル（昆虫類）などの生息、繁殖地となっています。上流部は、里山の中を川が流れタカハヤ、カワヨシ

ノボリなどが生息、繁殖し、中流部には、古都の発展とともに整備された田畑やため池が多く存在し、ギンブナ、オイカワなどが生息、繁殖するなど、たくさんの生きものがくらす大切な場所となっています。森林、水田、水路、ため池、河川のネットワークが大和川の水辺の生きものたちに多様な生活の場を提供しています。



大和川の上流、初瀬川（サワガニやカワニナなどが見つかります）

【水と緑の回廊整備】

王寺町では、豊かな自然を大切にしたまちづくりを基本に、個性的で住みやすいまちづくりを進めています。緑豊かな公園および公共施設の充実、水辺への親しみやすい環境づくり、街路樹やポケットパークの充実など、四季折々に花や樹木が楽しめる「水と緑の環状線（グリーンベルト）」で、王寺町内を水と緑で囲まれた、素晴らしい環境に整備しています。

『具体的な取組』

○多様な生きものの生息生育空間となっている貴重な自然環境を緑地や水辺などでつなぐ「生態系ネットワーク」の形成に向け、県内でモデル事業を検討します。

（6）地球温暖化への対応

地球温暖化は、私たち人間の生活だけでなく、多くの生きものの生息・生育に影響をおよぼすものであり、温暖化防止は、生物多様性の保全とも密接に関係しています。奈良県の温室効果ガス排出量は何も対策を講じなかった場合には、2020年時点では1990年対比2.1%増となることが予想されています。奈良県は全国に比べ家庭部門における二酸化炭素排出の割合が高くなっています。家庭部門の排出は個人の消費志向や行動意識に大きく依存していることから、県民の行動意識を変えることが重要です。このため、マイバグ持参、こまめに消灯、公共交通利用、エコ商品・リサイクル商品活用、「エコな〜ら大作